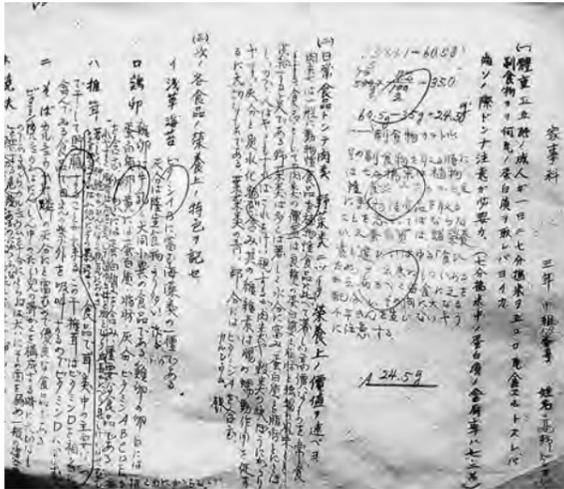


# 高等女学校時代

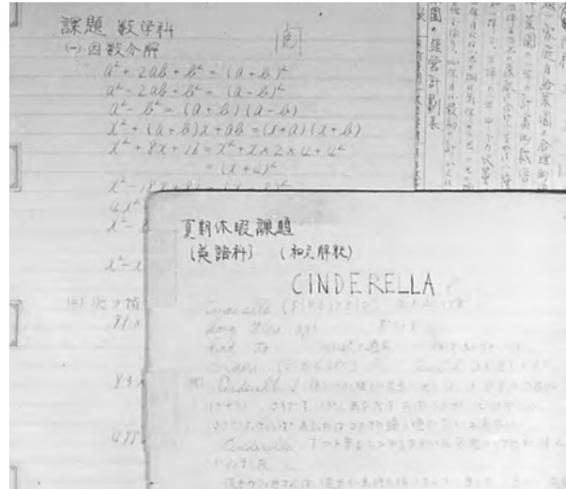
大正二五年～昭和二三年



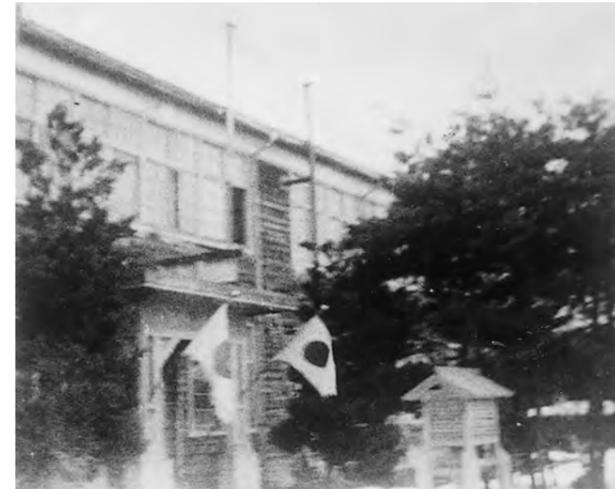




▲家事科答案用紙



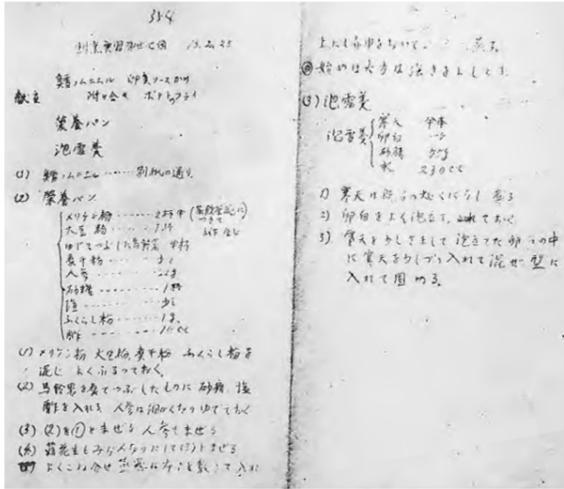
▲夏季課題レポート



▲入学式当時の玄関 (中林篤氏提供)

本校への入学志願者は、県立水沢高女に組織変更してより激増し、昭和二年には一年五〇名定員に対し、一〇〇名定員と門戸を拡大しなければならなかった。  
しかし、水沢町内の生徒でさえ、本校へ入学しえる数はクラスで二・三％程度で、実質的には狭き水沢高女であった。  
入学試験問題は、本校で作成し、あるいは口頭試問を課し、成績性格を考慮し、合・不合の判定を行った。

▼割烹実習プリント (高野喜美子氏提供)

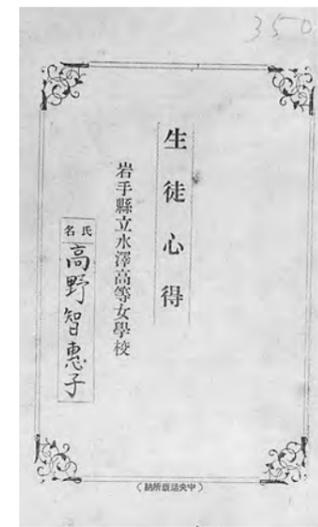


▼割烹実習 - 3年生から実施 (伊藤節子氏提供)



▲入学者父兄の職業別状況 (昭和一三年)

職業	人数	割合
第一高等女学校入学者父兄職業別状況		
第一高等女学校	1	100%
第二高等女学校	1	100%
第三高等女学校	1	100%
第四高等女学校	1	100%
第五高等女学校	1	100%
第六高等女学校	1	100%
第七高等女学校	1	100%
第八高等女学校	1	100%
第九高等女学校	1	100%
第十高等女学校	1	100%
第十一高等女学校	1	100%
第十二高等女学校	1	100%
第十三高等女学校	1	100%
第十四高等女学校	1	100%
第十五高等女学校	1	100%
第十六高等女学校	1	100%
第十七高等女学校	1	100%
第十八高等女学校	1	100%
第十九高等女学校	1	100%
第二十高等女学校	1	100%



▲合格通知書 (高野喜美子氏提供)

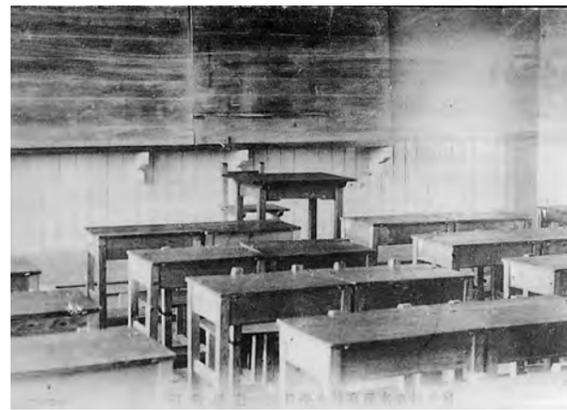
昭和九年三月二十三日  
岩手縣立水澤高等女學校  
入學考査合格通知ノ件  
貴校本校入學考査ニ合格セラレ候就テハ來ル四月二日午前十時入學式舉行可致候間保證人(父兄戸主又ハ後見人)同道時刻二連レザルヤウ出頭セラレ度候  
何入學式當日出頭セザル場合ハ入學セザルモノト認メ處理可致候間左様御了承下テ度此致通知也  
追而保證人ハ入學手續ヲ履行スベキニ付キ左記御持参御座候  
一、費用、學費ノ納入限紙、或則ノ對手續收入限紙、之々ハ御持参



▲音楽兼理科教室 (高橋成子提供)

▲高女学科課程 昭和3.4.1施行

科目	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	修身	修身	修身	修身
公民科	公民科	公民科	公民科	公民科
英語	英語	英語	英語	英語
國語	國語	國語	國語	國語
地歴	地歴	地歴	地歴	地歴
算術	算術	算術	算術	算術
理科	理科	理科	理科	理科
音楽	音楽	音楽	音楽	音楽
体育	体育	体育	体育	体育
合計	合計	合計	合計	合計



▲普通教室 (佐々木ナヨ氏提供)

教科指導

高等女学校カリキュラムの特徴  
高等女学校のカリキュラムは、特に「婦徳ノ涵養ニ留意」して行ふことが基本である。実科高等女学校が家庭婦人の実生活に必要な家政を主とするカリキュラムであるのに対し、高等女学校のカリキュラムは中学校と大体似ているが、英数をわずかに軽減して家事裁縫に要する時間を見出しているところに特徴がある。  
なお、カリキュラム、教科書は昭和三年から昭和一八年まで全国統一されていたことも特徴の一つである。

(小幡京子氏提供)

(高橋成子氏提供)

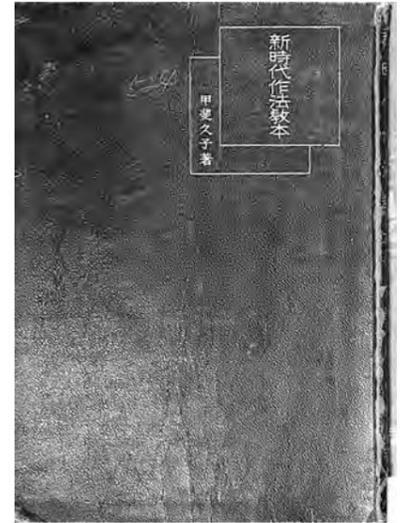


▲秩父宮殿下妃殿下献上作品



◀歴史答案用紙 (高野喜美子氏提供)

▼作法修身教科書 (小幡京子氏寄贈)

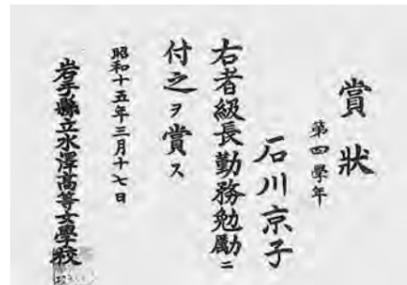


▼体操の授業 (三浦キヨ氏提供)

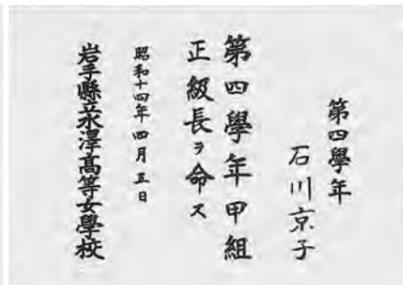


▲静物画 (蒔田幸子氏提供)

世界恐慌が深刻化し、この不況を打開するに  
**昭和四・五年**  
 時代背景と本校教育  
 世界恐慌の嵐、質素儉約と国産品愛用



▲級長精励賞状



▲級長任命書

▲岩手県立高等女学校校則 昭和3. 3.26県条例17号

**県立高女の学則**  
 昭和三年の県立高女の学則によれば県条例で、全県下の高女は三学期制とその期間・休業日を同一に規定しており、またカリキュラムの修了および卒業の認定も、各教科十満点中最低五点以上の成績を得なければ及第出来ぬことを規定している。  
 習字(国語)の評価は、美・良・良・可の四段階法であった。授業中の優秀作品は、バザーに展示、または秩父宮殿下に献上した。  
 二・三・四年生の級長は四月当初、前年度の学業成績・生活態度ともに優秀な者に対し、学級長が任命した。

は、常に質素節約に努め、生活をしっかりと安定したものにしなければならなかった。特に将来家計を預かる本校生は質素節約の美風を学ぼうとした。  
 国産品舶来品調査、国産品愛用の講演、国産品愛用の宣伝標語募集等各種行事を開催し、また国産品愛用週間・学用品等節約週間を設定し、実践的に取り組んだ。  
**昭和初頭の諸情勢**  
 恐慌で幕を開けた昭和は、当初から嵐の連続であった。激発する労働運動とこれに対する弾圧。政界要人に対する脅迫と暗殺。軍内部のクーデター未遂。山東出兵から満州事変にいたる軍事進出等々。お上その種の事件は枚挙にいとまがない。わずか一〇年間に内閣の交代が八回、三人の現職首相が遭難し、五・一五事件以来、政党政治は事実上失われ、官僚軍人内閣の時代に入った。  
 一方、県内にあっては、三陸津波の来襲冷害凶作が相つぎ、地方財政は逼迫し、教育予算の削減、教員給与の支払延期、昇給停止、また欠食児童の増加と学用品不足、授業料滞納と退学者が増した。  
 こうした激動する教育をとりまく内外の諸情勢は本校教職員と生徒に強い影響と関心を与えずには置かなかった。彼等は共に苦悩し、ともにこの難題を克服し、解決しようと純粋に、そして意欲的に学んでいった。



▲上海の爆弾事件 - 「報知新聞」(昭和7. 4. 30)

**岩手銀行閉鎖 - 校友会活動ストップ**  
昭和六年十一月、銀行パニックにより、岩手銀行水沢支店閉鎖。校友会積立金も一時凍結され、昭和六年度校友会活動に支障を来した。

**冷害による地方産業の育成**  
—— 蠶育指導 ——  
外貨獲得の重要産業である生糸原料の、岩手の生産地は県南地方であった。  
昭和三年五月、大降霜に遭い桑被害を受け、また昭和四年の世界恐慌の影響により糸価は暴落した。



▲後藤新平銅像 昭和19年4月まで水沢公園にあった。

**郷土の偉人後藤新平逝去**  
—— 生徒一同愕然 ——  
昭和四年四月十六日の朝礼。生徒は大矢校長より、郷土の偉人後藤新平が政治の倫理化運動推進の全国遊説中、大津附近で卒中に倒れ、京都で他界する旨の報に接し、一同愕然とし、黙祷を捧げた。



昭和初期に暗雲に閉ざされた世界に新風を吹き送り、「自力更生」「難波汝を玉にす」を政治信条として登場するのが、郷土の偉人首相齋藤實である。

**本校生と齋藤實**  
・昭和二年四月一日 ジュネーブ軍縮会議全権時代、慕参で帰郷の際、本校職員生徒一同 駅頭歓迎する。  
・昭和七年六月一日 齋藤實組閣祝賀会を開催する。  
・昭和七年一〇月三日 齋藤實組閣後初の帰省、

**昭和七年**  
昭和初期に暗雲に閉ざされた世界に新風を吹き送り、「自力更生」「難波汝を玉にす」を政治信条として登場するのが、郷土の偉人首相齋藤實である。

—— 蠶育受賞者 ——  
昭和七年度 一等 佐藤リツ  
昭和八年度 一等 小原アエ  
昭和九年度 一等 小関ミヤ・高橋ツヤ  
昭和十年度 一等 熊谷ワカ・北郷キワ・熊谷サト  
昭和十一年度 一等 遠藤トキ子・他二名

◎標語七種

- 一、國の富は國産愛用から 三年 小林 俊子
- 二、國産愛用は富の母 二年 佐々木信子
- 三、見榮より地味な國産品 四年 石川 昌子

以上國産愛用週間に因みて募集。

- 一、清濁整頓女の務 四甲 佐藤 カツ
- 二、清濁は保徳の武器 同 奥村 友子
- 三、健康は清濁整頓より 同 古川 ヒサ

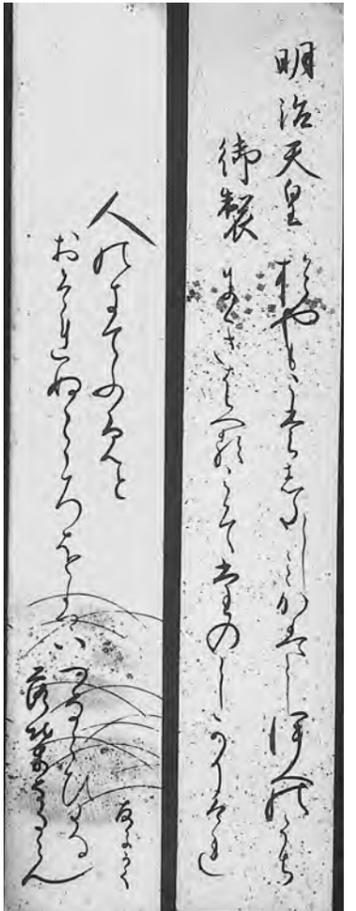
以上健康週間に因みて、四甲より募集。

◎國産品と舶來品の調

萬年筆	鉛筆	時計	石鹼	ペン先	龍盤	齒ブラシ	クリーム
國産品 二二二	國産品 三三三	國産品 一一一	國産品 二二二	國産品 三三三	國産品 四四四	國産品 五五五	國産品 六六六
舶來品 一一一	舶來品 二二二	舶來品 三三三	舶來品 四四四	舶來品 五五五	舶來品 六六六	舶來品 七七八	舶來品 八八九
計 二四五	計 三二五	計 四一六	計 五〇七	計 五九八	計 六八九	計 七七八	計 八六九

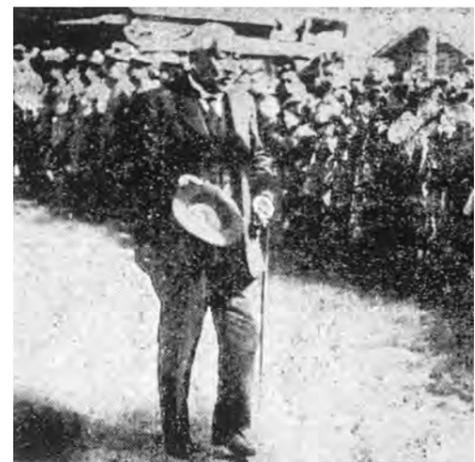
昭和五年十一月調査。人員三四〇人

▲国産品愛用標語



▲国語一習字 上(高野貴美子氏提供) 下(久松友子氏提供)

**昭和八年**  
非常時なればこそ防火意識の高揚  
この年、凶作農民救済債発行、暖冬のため木炭価格暴落、県内銀行倒産合併、失業者増大、欠食児童激発、吉小路大火発生。  
こうした非常時を迎え、防火意識の高揚指導を図るとともに、本校初の防火避難訓練を実施した。



▲齋藤實組閣後初の帰省 (昭和7. 10. 3)

出迎歓送行列を行う。講演拝聴する。  
・昭和一〇年五月一三日 九時本校へ来校、訓辞あり。

**昭和六・七年**  
満州・上海事変  
砲身も凍るてふ満州の荒野に戦ふ 勇士のばふ  
いつの世もことなき世こそなかるらめ  
ことある時に心挫くな  
—— 大矢米村(校長) ——  
昭和六年九月の満州事変、昭和七年一月の上海事変の勃発に伴い、本校では在満将士の武運長久祈願のため、全校生駒形神社へ参拝。  
七年一月二七日、日報記者鱒沢氏の満州事変視察の講演会の開催、二月三日校友会寄附として在満同胞慰問金として五円送金、三月三日岸少佐の上海事変の講演等、昭和六・七年は満州上海事変の武運長久祈願の年であった。



▲満州派遣将兵家族に贈呈



▲駅頭壮行会



▲ラジオ体操



▲菅野愛子

この年より、本校生は外国に関心を抱くようになり、昭和一〇年七月には高女第九回生菅野まさ子が北米ロスアンゼルス、同学生高橋いづ子が満州国北平（北京）へそれぞれ移住を試み、各地において母校の名譽を担い活躍した。

高女七回生佐々木信子は六原道場一回訓練生には入っていないが、六原道場入場後昭和八年一月二日、石黒知事の媒酌により蓑毛正明氏と結婚、ブラジルサンパウロ州チエテへ移住。また同年、高女六回生菅野愛子が北米ロスアンゼルスへ移住している。

### 海外飛躍

昭和七年九月、県下各都市の推薦、男子五六名の收容教育を皮切りに、昭和八年七月、県下の女子青年団幹部七五名が入場教育された。この女子第一回訓練生の中に、本校卒業生及川ナヨ・芳賀キク、油井千代三の三名が入場しており、これがまた本校生での六原訓練生第一回生でもあった。

旨として、この年より、従来の弓道以外に、懐剣・薙刀を設備し、練習日を設定して強化指導に当たるとともに、体力の向上を期して、昼休み全校ラジオ体操を週月、木曜日の二回実施する。

**本校初の六原青年道場生誕生**

県立六原青年道場は、昭和七年一月時の石黒知事の県議会説明主旨によると、「今日教育上欠陥とも認められる、信念と実力の啓蒙に務める」ことにあり、そのためには「県下の青年男女を訓育し、地方風教を作興し、地方産業の開発に尽し、或は海外への発展を図り、以て、県の興隆に貢献する所の中堅人物を養成」しようとするものであった。

六原青年道場は六原原野を払下げ、自給自足で運営しながら、施設を広く開放し、見学実習

### 武道奨励と体力向上

「国民精神の作興」の精神の一貫として夏休み中に国旗掲揚柱が完成。九月一日、掲揚式を開催。生徒の国旗に対する関心が高まる。

### 国旗掲揚柱完成

派遣将兵見送り七回。一月三〇日、派遣将兵慰問用水沢名所絵葉書三三〇枚、愛国婦人会へ寄贈。二月二日、満州派遣将兵郡内出身者へ通信用として家族に贈るため生徒一同ハガキ一、五〇〇枚に絵を書く。また同家族慰問金を募り七円九二銭を送る。三月四日、慰問用絵葉書および官製ハガキ約二、〇〇〇枚を郡内派遣将士家族宛に贈呈する。

### 冷害凶作対策——一坪園芸指導

俄育指導とともに、この年より、冷害凶作対策として、各自の庭隅、畑の隅を利用し、一坪園芸の実地指導をし、収穫適期には出品者一同で審査会を実施した。

- 昭和七年 白菜 一等 佐々木敏子
- 昭和八年 聖護院蕪 一等 熊谷 ワカ
- 聖護院大根 一等 阿部 ノブ
- 昭和一〇年 苺(二年) 一等 粟野タマ子
- 昭和十一年 苺針 一等 及川 栄子
- 他五名

### 援護活動の推進

この三陸沖大地震発生により、三陸沿岸に大津波が襲来、死者一、四〇八人、行方不明一、二六三人、家屋流失二、九六九戸、焼失二五〇戸、船舶流失五、八六〇の大被害をうける。この月余震一、〇〇〇回に及ぶ。

三月六日、地久節拝賀式後、風邪予防のため災害地へ寄贈するマスク、一、二〇〇個作製、即日三陸津波対策本部へ発送。災害見舞金職員分五五円、生徒分三五円送金する。

三月八日 本校同窓生小川シン・小島松子の二人罹災し、会員より醸金して見舞金贈呈する。

### 賞状

第二學年

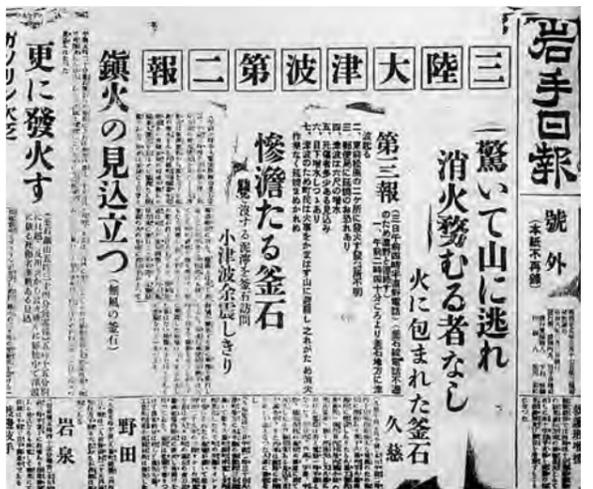
高野喜美子

右者蔬菜栽培ニ於テ  
優秀ノ結果ヲ得タリ  
依テ之ヲ賞ス

昭和十年六月十九日

岩手縣立水澤高等女學校

▼三陸津波号外 岩手日報3月3日



### 国民精神の作興

国民精神が剛健であれば、たとひ領土が狭くとも、物資が乏しくとも、外来思想も経済生活の不安も、不慮の災害も決して恐るるに足らず、艱難を打開して国家興隆の道を講ずることが出来る。―― (校友会誌八号)

### 将兵への慰問と壮行

昭和八年初頭、日華両軍山海関で衝突。春三月、日本軍熱河入城、この月国際連盟脱退し、戦闘ますます激化する。

本校生の戦場への壮行会、派遣将兵への慰問度重なる。一月二三日、駒形神社へ職員生徒全員在満将士武運長久の祈願。一月二五日、満州

# 昭和九年

## 大凶作

天候不順で稲の病虫害発生、七・八月初旬より低温・長雨続きで降雹もあり、この年は明治三八年以来の大凶作となり、五〇%の減収。小学校欠食児童九、〇〇〇人にのぼり、全国的な話題となった。

やがて来ん寒さはいよいよまさるらし  
冷害の地さこそと唄ばゆ 大矢 米村  
食卓の淋しくなれるこの頃を  
何かうれしくとる夕餉かな 坂本 妙

## 凶作対策協議会設立

凶作の窮状を察し、この年専修科生徒の旅行は中止し、義捐。一月二〇日、四年生は修学旅行を縮小節約し、集約金一〇円を凶作地へ寄附。

この美しい隣人愛の発露に石黒知事から「旅行費節約しての義捐一入有難く御礼申上候」のていねいな謝辞を頂戴している。

一月二七日、凶作対策協議会を設立し、次の各事項を決定し、凶作対策の研究を深めるとともに救援活動を実践していった。

修学旅行費節約、校友会誌発行費節約、廃物利用展覧会の開催、救荒食、栄養食に関する伝講会ならびに試食会の開催、当地方の妊産婦食物調査、割烹実習費節約、寄宿舎費節約、麦飯奨励、克己毎日継続。

# 昭和一〇年

## 凶作対策活動

昭和九年の大凶作にひき続き、この年も凶作。本校生の退学者昭和九年二一名、昭和一〇年一九名と例年に比較して多い。家事都合による退学は昭和九年一一名、昭和十年十名と例年に倍増しているところから、凶作の経済的事由によるものと考えられる。

## 廃物利用展覧会開催

第一回廃物利用展覧会が、前年度の凶作対策協議会の決定事項により、一月十九日開催、古衣利用の敷物制作、古洋服利用の子供服製作等多種多様の作品が展示され、二十一名が入賞。なお製作品を競売し、十一円の収入金を本校凶作対策協議会へ寄付した。



▲ 廃物利用展覧会賞状

## 凶作対策寄附会処理

(収入金) 二十八円二十八銭  
五円〇〇銭 専修科生修学旅行寄附  
十一円〇〇銭 第一回廃物利

## 用展寄附

(支出金) 二十八円二十八銭  
四円三十九銭 克己デー収入  
七円八十九銭 職員昼食費節約  
九円九十銭 本校生徒救済費として支出。但し県教育会交付救済費と合して本校生徒奨学資金寄附

(残金) 十八円三十八銭

▼ 秩父宮殿下に献上した風俗人形、本県部隊の大隊長秩父宮殿下御成婚の際、旅情を慰めるため献上した生徒製作の時代人形



# 昭和一一年

## 二・二六事件と本校生

二月二六日、「警察より、今晚東京に起りたる

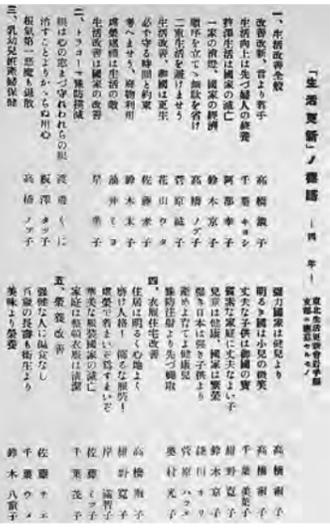
凶変に関し注意ありたり。」と学校日誌に記されている。

いわゆる皇道派青年将校のクーデターにより、郷土の内大臣齋藤實が暗殺された。

本校生一同、三月二五日、故齋藤實の遺骨を出迎し、五月二六日、埋骨式に代表として専修科生一同参列、偉人の変りはた姿に涙を飲まざるにはいられなかった。

## 生活更新の標語募集

恐慌と凶作にうちのめされ、政界の偉人を失い、生活の更新は自力更生以外にないその自覚を促すために標語募集を行った。



# 昭和一二年

## 昭和一二年の概要

昭和一二年七月七日、日華事変勃発。八月上海で日華両軍衝突。一月日独伊防共協定成立。一二月、日本軍南京を占領する。



## 時局と吾等

東洋平和の為、勇ましく祖国を發した皇軍が非道の敵に対して早や一年も廻って来た。大勢の皇軍を戦場に送った後、国内を我等日本女性は如何に護ったか？ 戦場に於て皇軍が如何に一命を投げうって戦っても銃後の護が不完全では戦地の勇士に対して道義的にすまないばかりでなく、結局は敗戦の憂国に遭遇せねばならぬ。事変勃発以来我等日本女性は常に「非常時」を念頭に置き、戦地の勇士を励まし応召軍人のお留守宅を訪れては、お洗濯、お針、子守など僅かなことでも真心をこめて行った。又何事も節約を心掛け、軍需品に必要なもの自ら進んで

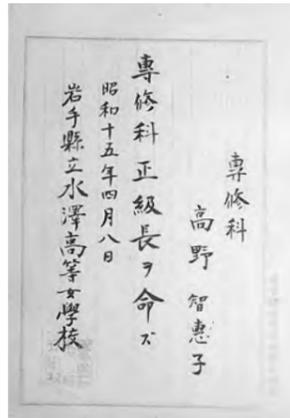
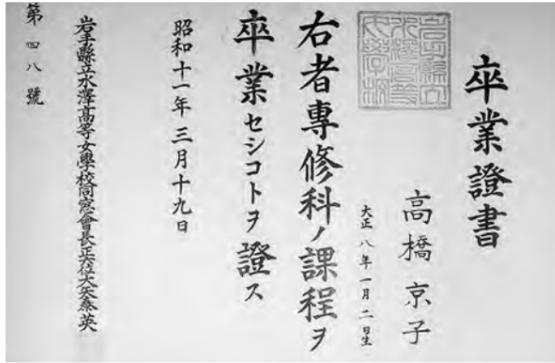
## 勤勞報国団

昭和一三年五月、国家総動員法成立に伴い、教育報国団の結成。また本校においては勤勞報国団が五月一日発足、発団式は校庭で挙行された。

日支事変はすでに完全な長期持久戦となった以上、職員生徒は各々の本文を尽し、艱難困苦を克服し、国策に随順してますます物心総動員を強化徹底せしめ、教育報国・勤勞報国の誠を致すことにより、聖旨に奉答しようとするものであった。

報国団活動として、町内清掃、国家的功勞者墓地清掃(齋藤墓地)、応召者家庭の衣類裁縫、千人針奉仕慰問袋製作、慰問文慰問絵葉書製作、廃品回収処分、廃物利用製作、展覧会開催、祈願祭参列、将兵歓送迎、体力増進雪中行軍等、実施項目をあげれば枚挙にいとまがない。

# 昭和一三年



▲夏着（ブルーマース）

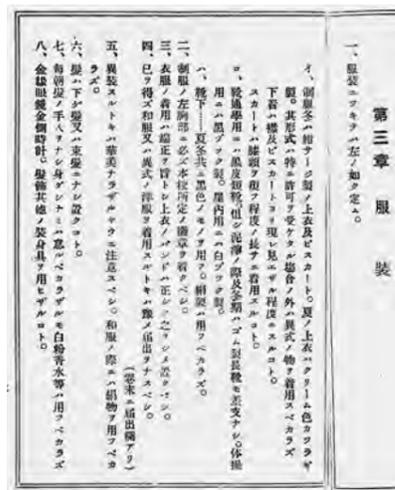


▲夏服 昭和9年3月27日以降



▲バッチ

服 装



▲服装規定（昭和9年以前）



▲庭球部



▼本校男子職員3名奉仕（8月24日）

愛國飛行場に  
教員團も奉仕  
後藤野愛國飛行場建設  
は全縣下舉げて涙ぐましい  
奉仕が續けられ既に中等  
校の根柢が固まり、今は  
青年校の根柢が固まり、  
青年校學生の地味作業の  
奉仕が爲され又八月には  
學生の勤勞奉仕が爲され  
ことに新に縣南六郡下中  
學小學生の勤勞奉仕が爲  
されことに廿三日各郡  
教育會宛宛通牒が到達し

◀第5代校長 及川俊次郎

昭和12.10.9～昭和14.9.19  
及川俊次郎校長は、勤勞報國團を結成し、又昭和15年には父兄会を設立、狹隘な昇降口・講堂の改築・奉安殿の移転を図った。



▲阪先生の自宅で行った生花実習



専修科の経緯  
本校の専修科は、昭和八年に開設した。そのころ高まって来た進学熱に依りて、従来町内の清明女学校等に進んで来た本校卒業生を吸収し、その教養を一層高めるためのものであった。設備として、同窓会より二七二円四五銭支出、同窓会の経営とされたが、実際は専任講師一名、他は高女の教員の奉仕であった。教室も高女の作法室を兼用した。修業年限は一年、それを越える場合は研究科と称した。  
昭和一五年に廃止となるまで、両料合わせて一三〇余名の卒業生を世に送った。



▲調理実習（地久節料理）

# 学芸

## 文芸音楽会

文芸音楽会は昭和二年から、校友会文芸部が企画開催している。演劇、演説、和洋朗読、独唱、ピアノの単連弾等、多種多様のプログラムである。

昭和二年、文芸音楽会の他に将来の女性として、壇上から自己の意志を発表する機会の多いことを考慮し、これを在学時代に修養することを目的に談話会を開催している。「窓の灯」節約の銃後運動（昭和三年）など自由題で発表している。

他に、文芸部が中心となり、講演会（斎藤實等多数）音楽鑑賞会（三浦環の「蝶々夫人」）等開催し、情操の陶冶、教養の修得の向上を図っている。

## 展覧会バザー

成績品展覧会バザーは、昭和四年九月開催が最初である。習字・図画・昆虫採集等の成績品展覧会場、裁縫手芸展覧会および即売会場、茶花盆栽会場、食堂会場と見事に飾り、非常に盛会であった。

昭和一〇年から、時代人形展、養蚕飼育展冷害対策食物改善展、廃物利用展等が加わり、地域課題解決に取り組むとともに、その収益金を県内冷害、関西風水害義損金として寄附している。

# 修学旅行

## 修学旅行の推移

昭和元年から昭和七年まで、五月中旬頃五泊六日前後の関東旅行で、参加者は四〇名前後。引率者二名の小規模旅行であった。

昭和八・九年には参加者が六〇名、引率三名と増加し、実施時期を一〇月中旬に変更した。また九年には旅行隊一行は経費を節約し、凶作地救援費として一〇円を寄贈している。

昭和一〇年には、関東関西・東北とコースを拡大し、参加者も七〇名と増加した。

昭和十一年には、さらに一泊を加え、八泊九日の、前年度コースをさらに延長、秋田横手を巡回し、黒沢尻経由で帰水している。

昭和十三年には、実施日・行程に検討を加え、六月実施の七泊八日、関東・関西コースをたどるようになった。

昭和十四年以降は、従来の物見遊山の修学旅行をやめ、敬神思想の徹底と国威の宣揚、皇軍将士の武運長久祈願を目的に、聖地参拝旅行と改名した。



▲昭和3年 日光御神橋



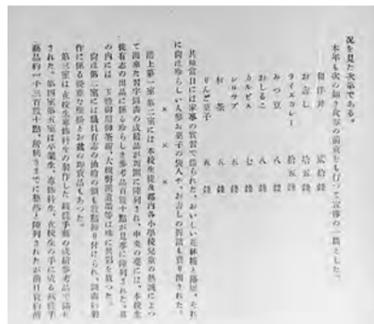
▲修学旅行の栞（松崎節雄氏寄贈）



▲人形展覧会



（大衛貞子氏提供）



▲展覧会バザー記録



▲文芸音楽会プログラム



▲三浦環

# 運動行事

## 運動行事の推移

本校運動会は、大正一二年から実施され、昭和七年第九回運動会まで、秋一〇月一五日前後に開催された。しかし、昭和八年第一〇回運動会からは一〇月の修学旅行の日程の関係上、五月下旬六月上旬に開催された。



▲昭和5年（石川光子氏提供）

は戦時色が濃厚になっていくが、種目数は五〇前後であった。

運動会の他に、学校行事として一月三日の体育デーには、五十m競走・綱引・排球・体操等を行い、さらに本校行事として、師弟の親睦の深化、体力向上を期する目的で卓球・排球・籠球・弓道大会等開催している。

一方、校外行事としては、毎年遠足があり、その時期は通例四年生の修学旅行隊出発後二、三日頃に行われていたが、また四年生も加わり、各学年ごとに盛岡・花巻等遠距離旅行もあった。しかし、昭和一三年頃から、軍事教練化し二月一四日には見分森へ雪中行軍をするようになった。



▲運動会会場全景 (佐々木ナヨ氏蔵)

▼新ラジオダンス 曲線と直線との快い調和のダンス。(3年)



▲遊戯グレストット(1年)無邪気な1年生が演ずる遊戯に誰もが心から微笑を送った。

▼エジプトダンス(4年) 幻想的エジプト舞踊。軽快な前奏曲に続いて描かれる絶妙な律動、小波より繊細な波動。



▲半輪体操(2年)エメラルドの空の下に映ゆる色彩美の表現。

## 校友会活動

### 校友会組織

岩手県立水沢高等女学校校友会会則は、大正一五年、岩手県立実科高等女学校校友会会則の検討を加え、改正する。さらに昭和二年、校友会組織分掌を明確化し、庶務部、文芸部、運動部、園芸部、購売部の五分に分け、部長と理事は職員より任命し、委員は二年生以上の生徒から選任している。文芸部、運動部、園芸部、購売部は、各部を起し、校友会活動を推進する。

### 文芸部

文芸部の主な活動は校友会誌の発行、文芸音楽会、名士の講演会の開催、図書部活動の充実を図ることにある。校友会誌は、在校生同窓生へ配布し、昭和六年創立二〇周年記念号には五〇〇部を印刷し、会員間の交流を図っている。



### 園芸部

園芸部は山野草花、熱帯植物の栽培を通して、校内外の環境の美化、情操教育の徹底を期した。昭和五年には、蝶蘭・コリス・ゼラニウム・ペゴニヤ鉢等一〇〇個、バザー用陳列即売展を開催し好評を得ている。冷害の七・八年には、自家野菜栽培指導を行い、昭和九年には庭園と温室の草花を栽培する園芸部と校舎裏農園に野菜栽培する農園部とに分離し、盆栽と野菜の収益金は校友会活動費の資金にまわしている。

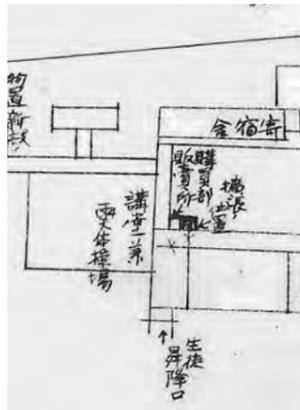


▲園芸部卒業記念 (星節子氏提供)

### 購売部

昭和二年、購売部と学用品部に分離、購売部

は生徒の学用品の購売を担当し、学用品部は授業中使用する諸用紙を時間内に配布し、学期末には所要数の費用を徴収し、両部の利益金を校友会収入金として校友会活動予算としている。昭和六年の純益六七円一五銭を資金とし、生徒昇降口つき当たり場所に県の許可を得、一坪の購売部販売所設置の計画立案し、新築されている。



▲購買部位置図面 (県書庫蔵)

### 図書部

文芸部に所属する図書部は、昭和三年、職員室隣の教室に販売部と併置して活動している。昭和四年、学級増により、従来の図書室を教室として提供、校友会図書総数一〇〇余冊を職員室の戸棚へ移転した。

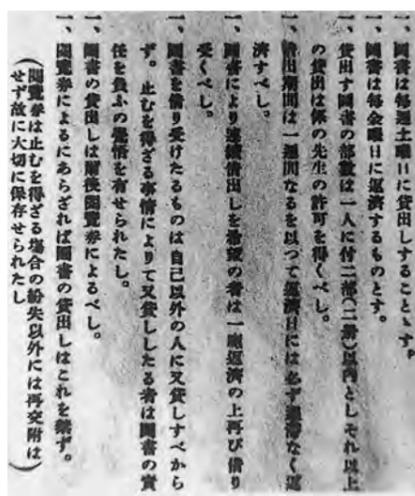
職員室で不便を感じていた図書を、昭和五年、校友会専有書架を設置し、昭和七年には図書閲覧規定を作成、ならびに図書閲覧券を発行し、利用の便を図る。またこの年、従来購入図書年間三〇冊前後であったが、初めて一三〇冊に達し、言語、自然科学、歴史地理、家事工学の専



▲購売部販売所設置申請書 (県文書庫蔵)

門書も充実した。昭和八年、低学年各教室に小辞林一冊、四年生には広辞林、詳解漢和辞典一冊ずつ設備し、また月刊雑誌「考え方」「受験と学生」、新聞を購読した。

昭和一三年、新聞による教育の必要性を認識し、四年生には読売、三年生には朝日、一・二・三年生には小学生新聞を配布し、指導の徹底を図る。なお、本校図書館へ、郷土出身の実業家郷古潔氏から、昭和一〇年以降毎年、多量の図書の寄贈があり、図書の充実を見た。



▲本校初の閲覧規定 (昭和7年)

## 技芸部

昭和三年誕生した本部は、一週間交替に生花・盛花を修業する有志五〇名による部である。

四季を通して生々とした緑の枝や美しい花が端然として又美しく活けられ、置物や掛軸と共に床の間に置かれてあるのを見ますとその家の婦人の趣味なりたしなみの一部をうかがうことができます。ここの花の修業は花を切つて挿すだけの遊芸でなく徳と精神を花の姿態に表わすのでなければなりません。

(校友会誌三号)

## 卓球部

昭和三年、県南女子中等学校大会二回戦で敗退、これが本校卓球部創設以来初の記録である。



▲昭和17年県大会優勝 (高橋富多葉氏提供)

## 弓道部

本校弓道部は古い歴史を持ち、絶えざる精進を続けて県下女子中等学校の弓道に唯一の力強い歩みを印してきた。

とくに、昭和四年、来教諭を迎えてからめざましい活動が見られ、昭和四年七月七日、東北弓道大会が当水沢で開催された際、日本屈指の弓道大家阿波範士・神永範士・紺野教士・阿部・吉田先生に一人ずつ手を取り指導される榮譽に浴するまでに上達していた。

その後昭和七年、来教諭は会津中学に転任し、小笠原・石黒両教諭を得て弓道部の礎石は堅固なものとなる。



▲昭和19年県大会優勝 (蒔田幸子氏提供)

それが昭和六年、団体戦において本校Aチームは準優勝。個人戦において本校大矢芳子が優勝。その後、準優勝時代が続き、昭和十一年、名門七校一四チームが参加し、個人戦団体戦ともに優勝する。特に個人戦においては本校菊地千田戦となり、優勝準優勝を分かち合い、昭和十四年まで連勝の栄冠をかち取る。

## 籠球部

輝かしい伝統を持つ本校籠球部は、昭和五年に創設され、初の試合を同年一月十七日、昨年の優勝校盛岡高女と対戦し、必死の奮戦に奮戦を重ねたものの、ついには実力の壁にはいかんともし難く、六二対〇のスコアをもって惨敗した。

しかし、次年昭和六年、県下女子大会で盛女を三対一で振り切り、昭和十一年には前年優勝校師範を三二対二八で下し、準決勝で盛女を二五対一六で敗り、優勝を目前にして決勝戦で黒女にわずか一点差で涙をのんだ。

## 排球部

本校排球部は、昭和五年、競技部より独立し、七月、排球競技大会が岩女において開催され、参加校岩女、関女、本校三校のリーグ戦となり、初の試合を行った。

本校	21	11	18
本校	13	15	21
岩女B			21
			関女

道場では大矢校長始め、春日・田中・加藤・田中・加藤・池上・松野教諭も練習精進するとともに生徒への指導に徹していた。

「的中よりも射型」「精神の鍛練」を標榜し、一途猛練習に余念がなかった。

昭和八年、県南女子中等学校第一回弓道大会が一〇月二十九日関女で、岩女(岩谷堂高女)、黒女・関女・本校四校三十七名参加し、一選手ハ射の競射の結果、接戦で一一中対一〇中わずか一点差で関女に惜敗した。これが公式大会当初の記録である。

### ◎団体競射◎

- 一等(一一中) 関女A(小泉きよ、小林きよ、小林ひろ、村田ちえ)
- 二等(一〇中) 本校A(杉沢節・前川貞子・六戸孝子)
- 三等(八中) 関女C
- 四等(六中) 本校C
- 五等(五中) 本校B

### ◎個人競射◎

- 一等 六中 小林ひろ(関女)
- 二等 五中 前川貞子(本校)
- 三等 四中 六戸孝子(本校)
- 四等 四中 佐藤ちえ(本校)
- 五等 四中 花測アイ(本校)
- ◎射道優秀賞◎
- 前川 貞子(本校) 花測 アイ(本校)
- 佐藤 愛子(関女) 清水みさを(関女)
- 高橋 なほ(黒女)

本校 19 17  
| |  
21 21 岩女  
その後、一〇月、県下女子中等学校大会で二回戦岩女と対戦し、両者相譲らぬ技量を持ち、競技に例のない対戦を演じたが、ついに敗退した。

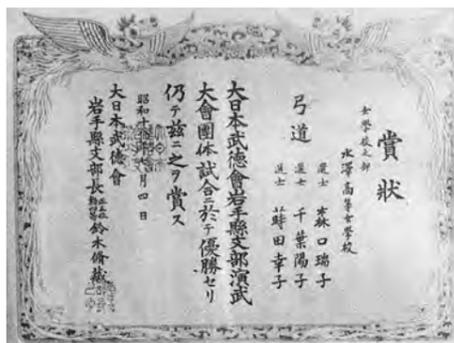
## 庭球部

本クラブの創設は古く源を実女時代に発する。昭和四年、県南女子中等学校大会で関女、岩女、花女、遠女、盛女、女師六校二四組が参加し、三回戦まで進出している。

昭和七年県女子中等大会では、個人戦で女師と本校菅野・石母田組が対戦し、四対一で敗退するが、その後、準優勝が続き、昭和一〇年には個人戦では岩崎・菅原組が優勝したものの、団体戦でもまたも準優勝にとどまる。



(佐々木澄子氏提供)



(蒔田幸子氏提供)

## 競技部

昭和四年、部創設。初期の競技部は、各種競技のバレー・徒競走等、校内学年対抗試合を企画する運動部の中核的部であるが、昭和九年より県下女子中等学校競技会(初陸上競技会)に参加し、総合一二点五位入賞をしている。

### ◎トラックの部◎

- 六〇m決勝 六等 石川マツ
- 四〇〇m継走 四等 小野寺・大矢・佐々木・石川

### ◎フィールドの部◎

- 三段跳び 二等 高橋ツマ 九・三三m
- 走高跳び 六等 高橋ツマ
- 籠球投 五等 佐々木益子

## スキー部

昭和五年、運動部剰余金からスキー六台を購

入し、部の創設となる。  
見分森スロープで練習に励んだが、昭和七年には雪不足もたたり、自然消滅となる。



▲運動部員練習後足洗い（三浦キヨ氏提供）

## 戦中期

昭和一四年～昭和二二年

### 戦中期の概要

昭和一五年十月二六日、本校創立三〇周年記念式典が挙行された。本校も三〇年の年輪を重ね、ここに、ようやく充実期を迎えるに至ったのであったが、時あたかも大東亜戦争開幕の前年、日中戦争は愈々深く泥沼に足を踏み入れ、国内は、次第に戦時色濃厚になりゆく時代であった。

「今や国際ノ情勢ハ曠古ノ大変ニ際会セリ爾臣民其レ世局ニ鑑ミ億兆心ヲ一ニシ時艱ヲ克服シテ」（昭和一五・一〇下賜の勅語）と、「国民精神総動員」「滅私奉公」「大政翼賛」が唱導され、聖戦支持の名のもとに、教育の現場も急速に戦時体制へ組み込まれていったのである。

一六年一月には「食糧増産運動に青少年学徒総動員」の通牒が発せられ、この趣旨にそって、従来の校友会も新たに学校報国団と改組されると同時に、開墾、農村動労奉仕等が一段と強化される中、大東亜戦争開戦を迎えた。

翌一七年七月には、敵性語としての英語全廃案が、県学務課より提示され、運動競技の面でも、参加二府県以上にまたがる各種大会はこの年をもって最後となり、報国団活動の強化と相俟って、校内の生徒の諸活動は低調となつていったのであった。

一八年三月、「大東亜戦争完遂と大東亜共栄圏建設の要望に應へ、皇国民教育錬成、教育の国防態勢を整備するため」（新岩手日報記事）新中等学校令が公布され、こうして足並みは揃えられ、一路、敗戦へと向かう足音は、ザクザクと音高く鳴り始めたのであった。



第6代校長 菊地 万吉  
昭和14. 9. 20～昭和20. 2. 21



第7代校長 阿部 広司  
昭和22. 2. 20～昭和21. 7. 31

### 「献華」の精神

作者田村万吉氏のことば

この作品は、殉国の英霊に感謝する心で制作に当り、軍国の乙女が滅私奉公の赤誠に感激し、英霊前に花を捧げる姿を刻み、「献華」と題した。

人生の花——乙女が天然の花を捧げる、美しくも神々しい姿の中に、軍国の尽忠報国の赤心を象徴したもので、願わくば、単なる美術品としてだけでなく、報国精神涵養の一助とされんことを。



### 「献華」について

彫像「献華」は、昭和一八年六月七日、盛岡市菜園で医療器械店「いわしや」を経営していた、田村万吉氏からの献納を受けたものである。氏は、水沢出身の成功者で、かねがね美術品を愛好され、姻戚に当たる彫刻家門伝正衛氏——宮城県出身、当時東京在住の彫刻家で、帝

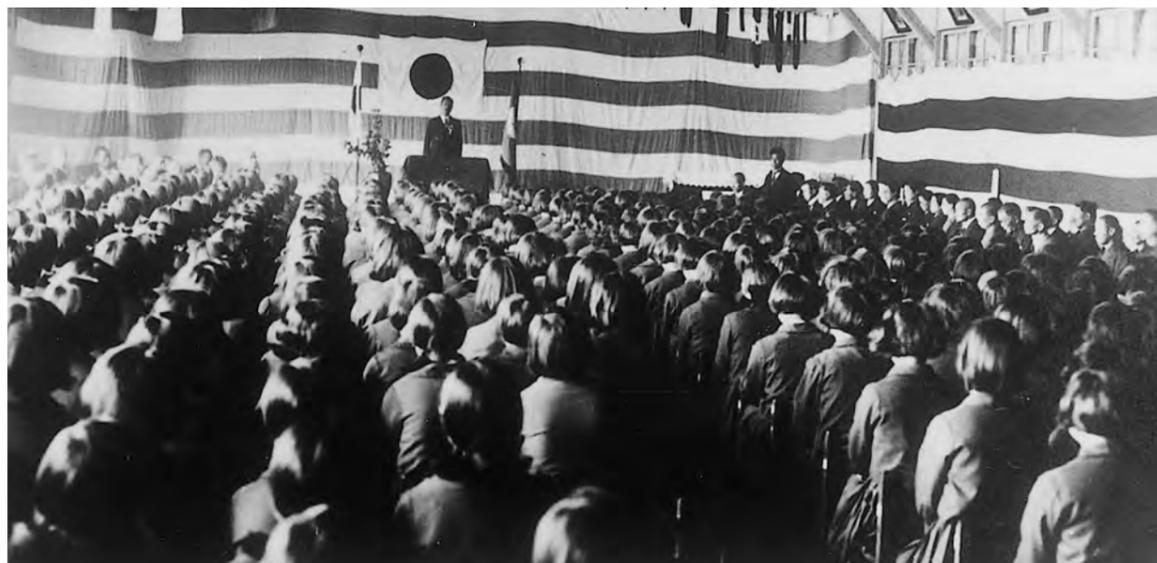
展・文展等数々入選——の作品を数多く所蔵されていた。その中から、第五回文展入選のこの彫刻を、竹馬の友であった、水沢市三本木、井筒庄蔵氏の仲介で本校に献納されたのである。

### 創立三〇周年記念式典

本校記念式の準備は、昭和一四年二月父兄会創立に始まり、一五年一月より具体化し、六月一〇日に各部の係予算が決定、記念行事は、一〇月二六日午前十時、式典をもって開幕した。式場は前夜の雨のため、にわか講堂に変更したが、当日は快晴の菊日和に恵まれ、知事代理藤村視字官、菊池、大矢、及川の三前校長、鈴木、高野、伊藤の各県議等、二五二名の来賓の臨席のもと、滞りなく挙行されたのである。

記念行事日程	
第一日 十月廿六日（土）	記念式 午前十時ヨリ
	祝賀會 正午ヨリ
	学藝品展覧會（正午ヨリ）
	（午後四時マデ）
第二日 十月廿七日（日）	物故者追悼會 午前九時ヨリ
	同窓會總會 午前十一時ヨリ
	音楽會（同窓生及本校）午後一時ヨリ
	学藝品展覧會（午前九時ヨリ）
	（午後四時マデ）
第三日 十月廿八日（月）	音楽會（来賓、父兄）午後一時ヨリ
	（午後四時マデ）
	学藝品展覧會（午前九時ヨリ）
	（午後四時マデ）

▲記念品津軽塗木盃  
高野喜美子氏提供



### 講堂の増築

三〇周年記念事業として、講堂の増築があった。この講堂は、大正一一年の郡立実女時代、生徒数一五〇名の時建築されたもので、その後十数年、生徒定員も四〇〇名に増え、広さ四八坪では屋内体操場としてはもちろん、全校の集会にも事欠く状態であった。多年、県にも増築を要望してきたが、時局柄、取り上げられずに来たものであった。

一四年二月父兄会を創立、懸案の講堂増築を中心に、併せて割烹室の拡張・ミシン室の新設も計画し、その熱心な陳情請願が実って、水沢町より一、〇〇〇円、県より一、〇〇〇円の支出が決定、これに父兄会・同窓会の拠出金を充当して工事にとりかかったのであった。

講堂二七坪の増築は一五年二月三日に竣工。工費は一、二一三円八〇銭であり、割烹室・ミシン室は一〇月八日完成。工費はそれぞれ、一、四一二円九十銭、一、五一六円五〇銭であった。

### 籠球部神宮大会に出場

戦時色の日ごとに濃くなりゆくこの期にあっても、その初期はまだ余裕があり、各種の運動競技が活発に行われ、高女期の最も充実した時期でもあった。

中でも、良き指導者体操教師田村光政に恵まれた籠球部は、昭和一五年、県大会で優勝し、一〇月、紀元二、六〇〇年奉祝第十一回明治神宮体育大会に出場した。

一〇月二八日、神宮外苑水泳場板張り特設コートで試合は開始されたが、緒戦、鹿児島県立国分高女に四対一七のスコアで敗退した。当時、籠球コートは校庭に一面あるだけで、屋内体操場（講堂）は、卓球部の練習だけで一杯という悪条件の中にあつて、田村教諭を中心に猛練習の成果をあげ、本校最初の全国大会出場を果たしたのであった。

次いで、大東亜戦争開戦の翌年、昭和一七年にも県大会で盛岡高女を降して優勝、第二三回国民錬成体育大会に駒を進めたのである。

当時は既に物資不足もひどく、ボールは配給制となって二個しか無く、ユニホーム・ブルマー等もほとんど手に入らず、母親の着物の裏をはがして作ったものであった。中でも運動靴は皆無で、練習時はこちらん、県大会も全国大会も、全員裸足で出場した。食糧事情も悪化しており、練習後の激しい空腹を満たすパン一切れすら、買うことのできない状態であった。

七月二五日、午前中の開会行事の後、試合は

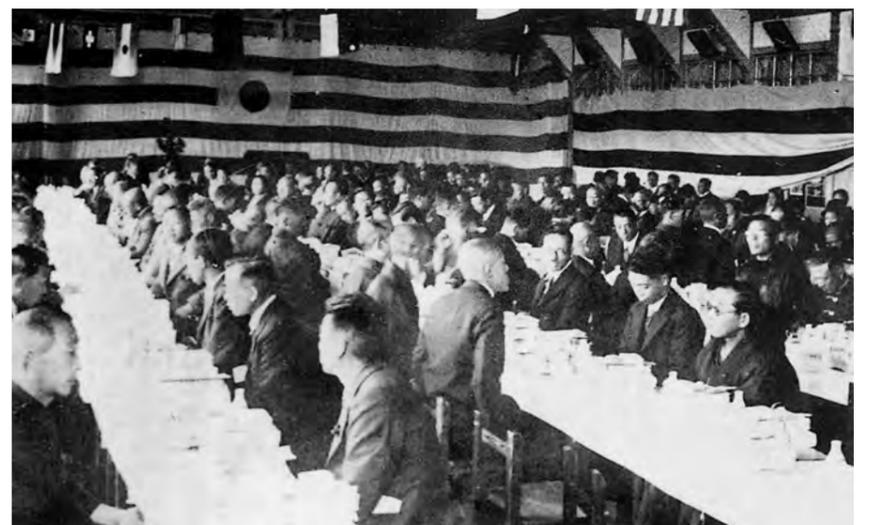


▶本校教育教育功労者として当日発表された人々。前列向つて左より、伊藤父兄会理事・夏谷同・大阪同・佐々木町長・大矢前校長・菊池同・及川同・田中教諭・達下同。

その日の午後、女高師校庭のコートで開始されたが、今回も、第一回戦奈良県立桜井高女の前に、無念の涙をのんだのであった。  
なお、時局柄、この種の大会は翌一八年からは中止となつたのである。



(亀梨淑子氏提供)  
昭和一五年前出場のメンバーは、石川サノ・及川成子・及川ミツ・小野寺秀子・佐藤セツ・佐藤ツタ・佐藤淑子・鈴木富貴子・千田カヤであった。



祝賀会▶

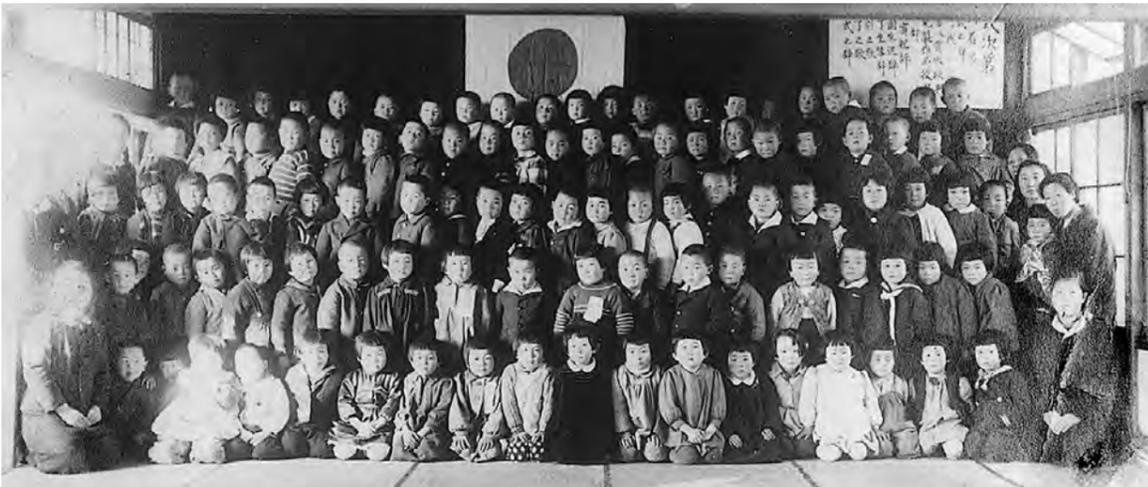


(亀梨淑子氏提供)

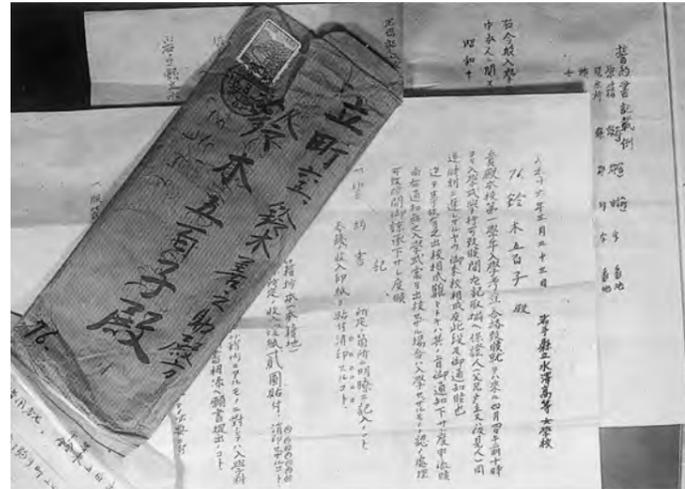




▶南都田季節保育所奉仕 南都田小の校庭。生徒はここで班分けされ、部落ごとの託児所や共同炊事に配属された。  
(昭和一七年六月石川ヨシ子氏提供)



▲水沢幼稚園奉仕 虚弱な者は田畑に出ず、幼稚園などの奉仕をした (昭和19年5月菅野昭子氏提供)



▲昭和16年合格通知書 (千葉五百子氏提供)



▲昭和16年の入学記念写真 (関沢恵子氏提供)

年度	入学人数	卒業人数	在籍人数	合計
昭和十六年度	100	100	100	100
昭和十七年度	100	100	100	100
昭和十八年度	100	100	100	100
昭和十九年度	100	100	100	100
昭和二十年度	100	100	100	100
昭和二十一年度	100	100	100	100
昭和二十二年度	100	100	100	100
昭和二十三年度	100	100	100	100
昭和二十四年度	100	100	100	100
昭和二十五年度	100	100	100	100
昭和二十六年度	100	100	100	100
昭和二十七年	100	100	100	100
昭和二十八年	100	100	100	100
昭和二十九年	100	100	100	100
昭和三十年	100	100	100	100
昭和三十一年	100	100	100	100
昭和三十二年	100	100	100	100
昭和三十三年	100	100	100	100
昭和三十四年	100	100	100	100
昭和三十五年	100	100	100	100
昭和三十六年	100	100	100	100
昭和三十七年	100	100	100	100
昭和三十八年	100	100	100	100
昭和三十九年	100	100	100	100
昭和四十年	100	100	100	100
昭和四十一年	100	100	100	100
昭和四十二年	100	100	100	100
昭和四十三年	100	100	100	100
昭和四十四年	100	100	100	100
昭和四十五年	100	100	100	100
昭和四十六年	100	100	100	100
昭和四十七年	100	100	100	100
昭和四十八年	100	100	100	100
昭和四十九年	100	100	100	100
昭和五十年	100	100	100	100
昭和五十一年	100	100	100	100
昭和五十二年	100	100	100	100
昭和五十三年	100	100	100	100
昭和五十四年	100	100	100	100
昭和五十五年	100	100	100	100
昭和五十六年	100	100	100	100
昭和五十七年	100	100	100	100
昭和五十八年	100	100	100	100
昭和五十九年	100	100	100	100
昭和六十年	100	100	100	100
昭和六十一年	100	100	100	100
昭和六十二年	100	100	100	100
昭和六十三年	100	100	100	100
昭和六十三年	100	100	100	100

▲昭和18年学校一覧表より

### 学級増の陳情

昭和一四・五年頃から本校志願者は急増し、当時の郡部高女の最難関と言われた。一六年度父兄会では痛切な要望として学級増が論議され、一七年には、盛岡・花巻・宮古高女を視察、一学級増の校舎増築具体案を練り、一八年には町当局に陳情、参与会においていったん決定を見たのであったが、現校地には増築の余地が無く、国民学校第二校舎との位置交換も考えられたが、時局柄、予算の見通しがかず実現に至らないでしまった。

### 育児実習

昭和一五年から、勤労報国団活動の一環として、胆沢郡南都田村の保育所奉仕が行われた。この保育所は、田植え期の季節託児所で、南都田小学校に設置された他に、各地域ごとにも開設されていた。非常時下の婦人労働力確保を図って、農会が音頭を取り、当時の南都田小学校上席女教員藤滝タマを中核として、小学校女教員の奉仕によって経営されていたものである。一七年までは、勤労奉仕として生徒を派遣していたが、一八年、新高等女学校規程によって家政科に育児実習が設定されてから、正課として全生徒を対象に行われるようになった。以後、二〇年まで継続し、天真な子どもたちとの接触は、当時の生徒の心に唯一の楽しい思い出となって残っている。

### 農村への勤労奉仕

男手を戦場に駆り出された農村の労働力不足に対処して、昭和一七年からは全校総動員で、農繁期の農村奉仕が行われた。水沢・真城・佐倉河・姉体・白山・前沢・小山・南都田の町村農会と連絡をとり、予め生徒の居住地を勘案の上分担当を定め、引率職員を配置して出勤した。遠い所で前沢の大袋地区等は宿泊して奉仕を続けた。こういう際にはプリントを渡して、礼儀作法をも指導している。  
いかにも女学校らしい細かい配慮のうかがわれる項目を二、三あげると、  
○お手洗、大は長くならぬよう。なるだけ起床前・就床後に。  
○入浴、初めは遠慮する。「お先き失礼」と挨拶。お湯を濫費せぬこと。連絡して隙間ない様に。最後の人は家人に報告。  
○入寝、家人に挨拶。お話ししないこと。寝行儀などがある。



▲六原道場作業風景（菅野昭子氏提供）

た—という姿で、新聞・雑誌はもちろん、教科書も持ち込まれず、ひたすら俗界と交渉を絶ち、「神ながら」の生活の中に、いわゆる「六原精神」をたたきこまれたのであった。



▲佐倉河にて（昭和18年6月佐藤加代氏提供）



▲小山にて（昭和18年6月中村タマ子提供）

### 学徒動員について

支那事変の拡大に伴い、昭和一三年三月二〇四日国家総動員法が制定され、さらに一六年一〇月八日、内閣より食糧増産運動に青少年学徒総動員の通牒が発せられ、次いで同年八月、文部省訓令「学校報国隊の確立令」一二月二二日には「国民動労報国協力令」が公布されて、国民動員体制は着々強化されていったが、中でも学徒は貴重な労務供給源となった。こうした趨勢の中に、一八年七月には「戦時学徒動員態勢確立要綱」で、「学徒ノ動労動員ヲ高度ニ強化シ在学期間中一年二付概ネ三分ノ一相当期間ニ於テ」実施されることとなった。

本県では七月一九日、学校報国隊の動労協力実施要綱を決定、内政・警察両部長名で各校に通牒が発せられた。その内容は、七月二六日より八月二〇日までの夏季休業期間中の動員出動ということで、本校では、薬工品作業、農会協力各五日間、計三〇〇名であった。さらに八月には、秋季動員計画が発表され、秋麦播種一斉運動として九月二五日より二〇日間の出動が展開された。

こうして「勤労即教育」は強調され、田植え・稲刈りを初め、農業増産に一年のほぼ1/3は動労に駆り出されることになったのである。

### 六原道場訓練

本校の六原青年道場訓練は、昭和一四年十月、第四学年全員の五日間にわたる入場訓練をもって始まった。昭和一七年からは、三・四両学年の入場となり、一九年、戦局の緊迫、学徒動員の強化のために中止となるまで、毎年実施された。

その目的は、「国体の本義に基づき、『神ながらの道』の精神に則り、その精神に基づいて示された生活基準を共同生活の間に克明に実践させ、心身の鍛錬を課すことによって、皇国の大道に徹せしめ、以て君国の為に立ち上がらせようとした」（当時の校長菊地万吉の記録による）もので、日本精神の全体的発揚を期し、国体に対する信念を深めるための精神修養の場、いわゆる大和魂錬成の道場であった。

ここでの生活は、まず午前五時起床に始まり、五時三十分、天照大神を祀った場内の神前に集合し、一同拝礼の後、天壤無窮の神勅の奉読、続いて、「ひ・ふ・み・よ……も・ち・よろづ」の号令の下、「大和働き」と称した独特の体操、朝食の後には、国道に面した道場入口の鳥居まで、時には西方山麓千貫石までを、片道四キロの駆足―雄走り―と称した―であった。

そして、終日の農作業を終えて夜は、備付けの赤ゲットにくるまって寝るといふ五日間であった。

制服での入場は許されず、割烹着にもんべ、頭には白手拭い―これも「御魂拭い」と呼ばれ



▲六原道場作業風景



▲六原道場作業風景



▲竹槍訓練



▲防空演習



▲昭和15年11月、4年生の六原道場。中央は田村場長

▶岩手日報提供

### 生徒動員の強化 計畫性を最高度へ

伊藤 長部  
藤内 政久  
政久 長部

五ヶ年級から七ヶ年級まで、生徒動員の強化に力を入れている。...

**北上河畔の開墾**

昭和一八年ともなると食糧事情は相当逼迫し、学校の校庭や競馬場など隙間なく耕されていた。そこで目をつけてられたのが北上川の河原で、町内の中等学校で区画して開墾することになった。本校は小谷木橋の南約五〇〇mの所、中洲と右岸を全校生徒で開墾した。地積は三〇アール、生い茂る茅を刈り倒し、その根を掘り起し、ソバを蒔いた。土は肥えていて相当の収穫をあげたが、北上川流域地帯には、この年のうちにもう開墾の余地はないありさまであった。

**銃後の活動**

昭和一八年度から、高等女学校においても、銃後を守る皇国女子としての、強靱な体力と旺盛な氣力を錬磨すべく、体錬科教授要目に、教練・武道が正課として採用された。本校では、陸軍少尉鈴木幸五郎を教練教師と



▶昭和一七・一一・二五 新岩手日報（岩手日報提供）

### 銃後乙女の氣魄 耳を劈く砲機を操練

#### 竹内部隊一日入營

水高女学校、砲機操練、...



▲小谷木橋付近の開墾（千葉範子氏提供）

して迎え、強歩・行軍・竹槍訓練などの戦時訓練が強化されていった。一方、武道の正課としての実施については、嘱託教師として菅原愛子が着任、全学年を通じて、体操の一環として薙刀の訓練が行われた。

▼昭和17. 11. 22 新岩手日報（「岩手日報」提供）

### 純情綴る水女生

#### 毎月送る慰問文の山

支那軍閥に脅かされた水高女学生、毎月送る慰問文の山...



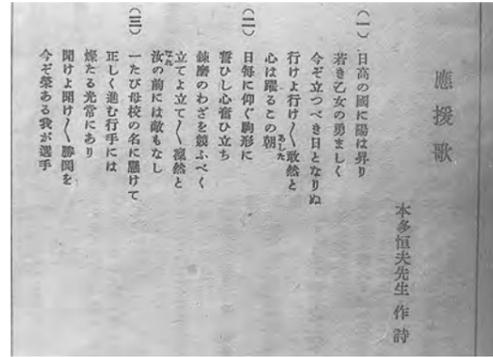


文化祭を初め、クラブ活動も再開し、二二年には水沢公民館を会場に、戦後初の演劇・音楽発表会も催された。

二二年には、中学校と同じく五年制となったが、四年の修学でも卒業は認められ、希望者のみ四〇名が五年生に進んだ。また、この年から一学年募集定員も二〇〇名に増加、昭和一六年頃からの学級増の要望がやっとここに実現したのであった。なお、水沢女子商業学校の吸収合併もこの年であった。

二二年七月には、阿部広司校長に代って、岩谷堂高女より清藤一郎校長を迎えている。

二二年四月、学制改革により新一年を募集せず、現在の二・三年生を併設中学校とし、水沢高等女学校は、ここに新制高等学校へと移行したのである。



▲本多恒夫教諭作詞の応援歌



▲動員先で卒業証書を手にする生徒（「暮しの手帖社」提供）



▲新しい指標



第8代校長 清藤 一郎  
昭和21. 7. 31～昭和23. 3. 31

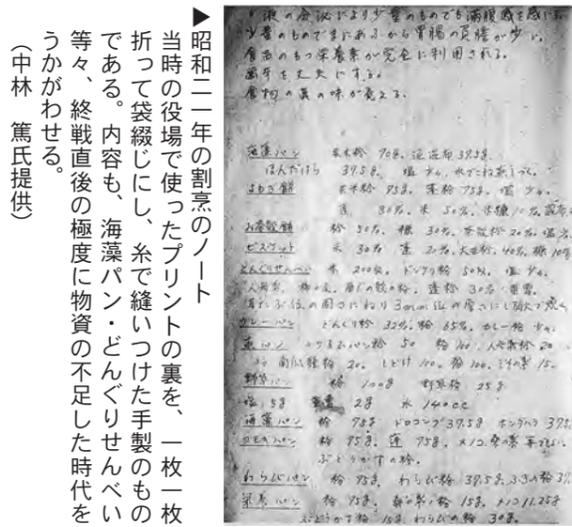
終戦後

終戦後の移行期について

戦時教育令により、昭和二〇年四月以来、授業は完全に停止されていたが、終戦を期に占領軍の行政下で再開される。

終戦直後は、極度に物資が不足し混乱の時代であったが、とにかく時間割どおりに毎日勉強できるのが何よりうれしかった、と同窓生の一人在がしみじみ述懐している。

英語も復活し、新教科「公民」では民主主義の講義、新憲法・男女同権についての討論など、授業の形態も新時代に即応したものに塗り変えられた。



▲昭和二一年の割烹のノート  
当時の役場で使ったプリントの裏を、一枚一枚折って袋綴じにし、糸で縫いつけた手製のものである。内容も、海藻パン・どんぐりせんべい等々、終戦直後の極度に物資の不足した時代をうかがわせる。  
(中林 篤氏提供)



黒板にはスシとあるが、井の中味はサツマイモである。これも当時の食糧難時代の産物である。  
(高橋ミサオ氏提供)



昭和二十二年三月、終戦後最初の卒業生。この年から高等女学校も中学校と同じく修業年限五年となったが、移行措置として従来通り修業年限四年でも卒業を認定した。八九名が卒業、四〇名が五年生に進んだ。中央女教員の右、阿部校長。  
 (三浦信子氏提供)



昭和二十二年三月、五年生の高女として最初の卒業生四〇名。中央・清藤一郎校長。  
 (中林篤氏提供)



昭和一八年第一七回卒業生寄宿舎一同  
 (小野伊豫氏提供)